

中江兆民と近代日本（中）

——『三酔人経綸問答』に関する覚書——

佐藤 誠

Ⅱ テキスト分析

『問答』には、三人の登場人物が、当時の国際的情勢における近代日本の課題に関して、自己の考えをそれぞれ順番に表明している。洋学紳士が民主制を賛美し、自由権の意義を強調するのに対して、豪傑君は、国内の旧守派の人々を大陸へ軍事的に侵略させることにより、日本の変革を提言するのである。また、南海先生は、両者の見解を批判的に検討して、いずれも西洋列強諸国の軍事的な圧力を過大評価することによって生じた早急な憶測に過ぎないと見なしている。そして、比較的穏当な外交政策論を南海先生が表明して、『問答』は終わっている。したがって、その作品は、必ずしも問答の形式を備えているわけではないし、三人の見解には、共通した論点が乏しいように思われる。しかし三人

の問題意識には、日本が確固とした独立の基盤を保持するためには、産業資本主義から帝国主義へと政治政策が移行しつつある当時の西洋列強諸国に対して、どのように対処すべきかという視点を認めることができる。そのような問題意識に対して、幸徳秋水は、『兆民先生』の中で、『問答』出版時における兆民自身の評言を次のように記している。すなわち、兆民はその作品に関して、「是れ一時遊戯の作、未だ甚だ稚氣を脱せず、看るに足らず」と述懐したことを、秋水は書き留めているのである。

しかし秋水の方は、むしろ、「其縦横に揮洒し去りて、多く意を経ざるの所」にこそ、兆民の才能が遺憾なく発揮されていると見なすのである。その作品には、「寸鉄殺人の警句、冷罵入骨の妙語、紙上に相踵ぐ、殆ど人目を眩せしむ」⁽¹⁸⁾点が認められると、秋水が指摘しているように、当時の時代思潮を諷刺する兆民の執筆態度を見出すことができる。実際、現実の国際情勢を超越した洋学紳士の理想国家論にせよ、また豪傑君の空想的な大陸進出論にせよ、兆民が登場人物を通じて、どこまで真摯に近代日本の課題を論じようとしていたのかを判断することは困難である。しかも、「寸鉄殺人の警句」や「冷罵入骨の妙語」などを用いて書かれた『問答』の末尾には、南海先生の論旨に対して、「南海先生胡麻化せり」⁽¹⁹⁾という眉批を兆民が付け加えている点を考慮すれば、『問答』は、時代状況ばかりではなく、作者自身に関しても、自ら相対的な距離を設定していることがわかる。確かに『問答』は、特定の歴史的状況の中で執筆されているけれども、そこに見出される諷刺的な要素を決して等閑視してはならない。そうした諷刺的な要素は、作品の読解に際して、多面的な視点を提示することになる。現実と理想とが複雑に交差するようなそうした視点こそ、『問答』に含まれる思想的な性格を特徴付けることになろう。そこで、『問答』のテキストを分析することにより、多面的な視点を

できる限り取り出して、諷刺的な特性を考慮に入れながら、『問答』は、近代日本の中でいかなる歴史的意義を備えているのかを論及することにした。そのような作業に取り組むことにより、兆民の思想的立場がある程度まで明らかにすることができると思われる。

一

紳士君は、何よりも民主制の価値を非常に高く評価し、アジアの小国が欧米列強諸国に対処するためには、軍事力の増強よりも、非武装中立に基づく道徳的な理念を保持することを勧めている。確かに、彼のそうした見解には、現実離れた理想主義が認められる。しかしながら、紳士君は、そのために、現実世界に対する認識に乏しいわけではない。実際、「第十九世紀の今日に在りて、真に武震を以て国光と為し侵略を以て国是と為し人の士を奪ひ人の民を殺し、必ず地球の所有主と為らんと欲する者は真に癡狂国なる哉」と彼は述べて、欧米列強諸国の軍事政策や植民地政策を厳しく批判している。したがって、現実の国際的情勢や歴史的認識に関する紳士君の洞察力は、むしろ正鵠を得ていると言える。現実世界に対するそのような洞察力にもかかわらず、紳士君は、理想的な理念を提示して、近代日本の課題に取り組んでいるわけである。

さて、紳士君の発想を支えている理念は、政治的な進歩に対する積極的な価値評価である。専制君主制から立憲制を経て民主制へ至る過程には、自由権の拡張と平等権の設定が見出される。すなわち、現実の歴史的経緯を考慮する限り、

西洋先進国、特にイギリス、フランス、ドイツなどが発展してきたのは、「自由の大義」⁽¹²⁾に由来していると、紳士君は見なしている。例えば、イギリスの発展は、「其大に発越して力を逞しくせしは査理第一の時自由の波瀾洶湧して旧弊の堤防を潰決したるよりして、有名なる大憲章の其間に崛起したる効果最も与りて力有り」⁽¹³⁾と述べられ、また近代国家としてのフランスも、「真に強盛の勢を固定せしは夫の千七百八十九年革命の偉業の賜なりと謂はざる可らず」⁽¹⁴⁾と判断されて、「自由の大義」を維持し、拡張させることが、国家や社会の発展の前提条件となる。自由権の拡張が、こうして、西洋先進諸国の隆盛を生み出してきたために、政治的進歩の正当性はある程度まで容認されざるをえない。

しかしながら、紳士君は、そのような西洋諸国の発展を無条件に評価しているわけではない。例えばイギリスは、一七世紀に「自由の制度を擁立し」⁽¹⁵⁾たけれども、「王家儼然として万民の上に臨み」⁽¹⁶⁾、しかも「五等爵位の設有りて亦世々相ひ承けて夫の平等の大義未だ完全ならざる」⁽¹⁷⁾ために、「平等の一義」⁽¹⁸⁾はまだ認められてはいなかった。したがって、「立憲の制は整は則ち整なり備は則ち備なるも、猶ほ人をして隠々然として微く頭痛の患を覚へしむる者有り」⁽¹⁹⁾と、紳士君は述べて、イギリスの政治制度を批判している。また、フランスの場合も、確かにフランス革命で、自由権とともに平等権が制定されたけれども、「一時に尽く諸国の制度を一変して平等の制と為さんと欲せし」⁽²⁰⁾たために、逆にナポレオン皇帝の専制政治を引き起こすこととなった。フランスの急進的な改革は、そのために、「狂顛に似たる哉」⁽²¹⁾と見なされるのである。こうして、「当時仏人が平等顛病の熱氣に鼓舞せられ」⁽²²⁾たために、結果として、「拿破崙旗幟の采色に眩乱し、綽約たる民主の天女を放遺して獐惡なる帝国の猛虎を豢養し、相率ひて自ら其餌食と為」⁽²³⁾ってしまったと言えよう。

以上から、イギリスやフランスの歴史的な事例は、必ずしも民主制の理想的な形態を表しているわけではないことがわかる。そのような見解は、実は、兆民自身が執筆した他の論説の中にも見出すことができる。

すなわち、フランス人民は自由権を獲得するために、ルイ十六世を処刑して、ブルボン王朝を打倒したことは、あまりにも急進的な改革であり、「猜疑百端人々自ラ安ンズル無く其禍蔓延シテ無辜ノ民ニ及ビ流血千里拳国且ツ墟ト為ルニ幾カシ⁽¹⁴⁾」という事態を生み出すことになった。したがって、「今日法蘭西人民ノ稍ヤ其自由権ヲ進暢シテ之レガ利益ヲ収ムルコトヲ得ル所以ノ者ハ其初メ脳ヲ砕キ腸ヲ破リ膏血ヲ街衢ニ灑ギタルノ致ス所ト謂フモ不可ナル無キナリ⁽¹⁵⁾」と兆民は比喩的に述べて、フランス革命の悲劇的な側面を強調するのである。そうした事態は、「英国人民ノ大憲令ヲ立ツル⁽¹⁶⁾」や「弥利堅人ノ独立ヲ図ル⁽¹⁷⁾」場合にも認められ、急速な変革が民衆に悲惨な結果を与えることが例証されている。そのような歴史的経緯を考慮すれば、近代日本が国会を開設して立憲政体を設立するために、「強斗テ詭激ノ論ヲ唱ヘテ腕力ノ説ヲ鼓シテ必ズ英法暴乱ノ跡ニ倣ハント欲ス⁽¹⁸⁾」る方法は、「狂ニ非ザレバ妄ナリ⁽¹⁹⁾」と判断されざるをえない。こうして、自由権という「自己本具ノ権ヲ恢復スルガ為メニシテ夫ノ木潰裂横溢ノ禍ニ至リシハ英法政府ノ拙陋ナリ英法人民ノ不幸ナリ⁽²⁰⁾」と見なされるわけである。兆民は、その結果、イギリスやフランスの急進的な政治改革を批判しながら、「英法人民ハ哀レム可キナリ慕フ可ラザルナリ⁽²¹⁾」と断言することになる。

しかしながら、現実の政治変革に関しては、そうした様々な弊害が見出されるけれども、現実世界を改善し、超越しようとする理想主義を表明する紳士君の発言を決して等閑視すべきではない。たとえ実現することが極めて困難であったとしても、社会や世界をよりよく改善するためには、理想主義的な発想は、むしろ不可欠な効力を備えている場合が

ある。そして、そのような発想が具体化された見解こそ、紳士君が主張する平和論であり、非武装中立論に他ならない。欧米列強諸国が、産業資本主義政策から帝国主義政策へと対外政策を転換しつつある時期に、近代化への道を歩み始めたばかりの日本が、独立国家の基盤を維持しながら、どのようにしたらそれらの国々とある程度まで対等に交渉していくことができるのか、当時の明治政府にとって緊急の課題であった。その場合、欧米列強諸国のように軍事力を増強することは、日本のような弱小国には到底不可能であり、また、必ずしも有効な政治政策であるとは見なされないだろう。紳士君はそこで、「理義」という道德的な原理を援用しながら、理想主義的な国家建設を提案することになる。すなわち、「疆土狭小に民衆寡少なる者に至りては、理義に拠りて自ら守るに非ざれば他に憑恃す可き者有ること無し」と。その具体的な国家像は、何よりも武力を全面的に放棄して、「民主平等の制」を設定しながら、国家全体を「道德の園と為し學術の圃と為」すような性質を含んでいることが求められる。紳士君は、こうして、「垂細亜の小邦を以て、民主、平等、道德、學術の試験室と為さん」ことを勧めるのである。そして平和論に関しては、サン・ピエールの『永久平和論』を要約しながら、「縦令ひ人心功名を好み克捷を喜ぶの情終に除く可らずして平和の実竟に世に施す可らずと為すも、苟も理義を貴尚する者は当に務て此田地に前往することを求む可きなり」と述べて、紳士君は「理義」の価値が国家間の平和に役立つことを主張する。しかし、サン・ピエールは、現実の政治情勢を等閑視して、「唯旧来の制度に沿因して略ぼ更革を加ふること無くして、専ら条約誓盟の末を頼みて以て平和の実を得んと欲」しただけであり、戦争を回避する有効な手段を提供したわけではない。

すべての国家が民主制を採用して、「宇内万国を合して一大聯邦を組成」すれば、国家間の争いは必然的に消滅する

ことができると主張したのは、サン・ピエールの見解を継承したドイツの哲学者カントである。実際、「民主の制度は、兵を戡め和を敦くして地球上万国を合して一家族と為らしむるに於て欠く可らざる」政治制度である以上、国家間の平和を維持するためには、「理義」に基づく道徳的な原理を取り入れることが要件となる。

紳士君は、さらに、自衛権をも放棄して、たとえ他国による侵略の恐れがあったとしても、無抵抗に甘受することを提案するのである。その理由は、「全国民を化して一種生きたる道徳と為して後来社会の模範を垂れしむる」こと⁽¹⁸⁾に由来している。そのような極端な理想主義は、当時の国際的情勢を考慮に入れば、机上の空論のように思われる。しかし紳士君の理想主義的な見解には、軍事力が国家権力の指標となろうとしていた帝国主義的な時代思潮を間接的に批判する効果を示していることも認めねばならない。理想主義は、たとえ現実の政治世界に適応しうることができなくとも、その政治世界自体が包摂している様々な矛盾を露呈させることもありうるのである。したがって、紳士君の見解は、あるべき理想的な世界像を提示することにより、現実の国際的情勢に関する諸問題を一層明確にして、批判する見方を提供していると言える。

そして「理義」に基づく紳士君の外交論は、兆民自身の論説にも見出されることに注意する必要がある。

兆民が、『論外交』や『外交論』と題する論説の中で、繰り返し述べているのは、富国強兵政策を極力回避して、何よりも道義による外交政策を提示することである。日本のような小国が独立を保持するためには、大国の軍事政策を模倣するのではなく、「信義ヲ堅守シテ動カズ道義ノ在ル所ハ大国ト雖モ之ヲ畏レズ小国ト雖モ之ヲ侮ラス」⁽¹⁹⁾という原則を堅守することが要件となる。そして大国から不当な攻撃を受けた場合でも、決して武力による対抗策を取るべきでは

ないと、兆民は主張するのである。すなわち、「隣国内訌有ルモ妄リニ兵ヲ挙ゲテ之ヲ伐タズ況ンヤ其小弱ノ国ノ如キハ宜シク容レテ之ヲ愛シ其レヲシテ徐々ニ進歩ノ途ニ向ハシム可シ外交ノ道唯此レ有ルノミ」と。そのような外交政策を取り入れている国は、当時の西洋では、「小国ニ在テハ瑞西白耳義荷蘭」であり、また「大国ニ在リテハ北米聯邦即チ是レノミ」と述べて、兆民は具体的な国名を挙げている。しかも彼は、弱小の国が強国と同盟関係を結ぶことも、厳しく回避することを提案している。その理由は、「貧弱の国を以て他の強大の国に依頼するは極めて悪るし依頼てふ事は一身の上にも悪るし一国の上にも悪るし依頼の源は畏懼なり畏懼とは何事を畏懼する乎と云へば亡滅を畏懼する」ことになるためである。したがつて、「畏懼する所さへ無ければ依頼するには及ぶまじ亡滅を畏れて他国に依頼するは羞辱を招くの道なり依頼の一念を掃ひ去らざれば国の独立は望む可らず」と彼は述べて、「畏懼する所」を取り除き、「亡滅を畏れて他国に依頼する」ような外交政策は、国家の独立基盤を揺るがすことになる、と警告するのである。

こうした考えは、後に日本が締結した日英同盟や、その後の軍事国家へと辿っていった歴史的な経緯を考慮に入れれば、先見の明を示していると言えよう。

西洋列強諸国が、国際法を無視して、たとえ小国日本に対して理不尽な侵略を企てることがあったとしても、日本国民は、「皆悉く一死以て自ら潔ふするに決心」することが求められる。そして日本は、「全国焦土と為るも辞」することなく、「義と俱に生じ義と俱に斃れ瑣々たる利益便宜の鄙情を一点も胸中に存せざるに於ては彼れ列国の兇暴なるも何ぞ畏るゝるに足らん」と兆民は断言して、軍事力よりも道義に基づく中立的な立場を堅持することを提案するのである。非武装中立を保持する兆民の見解は、こうして、「全国民を化して一種生きたる道德」にすることを勧めている紳士君

の主張と重なっていることがわかる。特に、「第十九世紀の今日に於て亜細亜の一孤島に於て全国民討死と一決して一歩も退かざるの心を持して打失せざる時は一陣道德の大風颯然として西向し欧州諸国の政界部面に堆積せる利己的汚穢の雲霧を一掃して余り有るを得ん」という文章には、西洋諸国の帝国主義的な「文明化政策」を批判して、あくまで道義に基づく外交政策を重視する兆民自身の信念が反映されていると言える。

二

豪傑君は、紳士君と同じように、一九世紀の西洋列強諸国は、アジア地域への植民地支配を企てながら、帝国主義的政策を試みる「文明国」であると考えている。そして、「武備」、すなわち軍事力が、「各国文明の効の統計表」として重視され、「戦争は各国文明の力の驗温器なり」という文章が示しているように、「武備」を充実させて、有利な戦争を遂行する国家こそ、西洋文明国家であると見なされるわけである。したがって、当時の国際情勢は、「強弱大小の勢」によって特徴付けられるために、「他邦に後れて文明の途に上る者は、一切従前の文物、品式、習尚、情意を挙げて之を変更せざる可らず」という政策を採用することが求められる。こうして、そのような西洋列強諸国の勢力に対抗するためにも、軍事力を行使して、「一大邦を割取りて己自ら富国と為さざる可らず」、という豪傑君の主張が提示されることになる。その場合、豪傑君は、必ずしも単なる大陸進出論者、または国権拡張論者として描き出されているわけではない。

急速に近代化政策を導入した日本では、大多数の人々がそうした政策に賛同していたわけではなく、旧来の伝統や社会的慣習に固執する「恋旧家」⁽⁸⁰⁾と、新たな変革や価値観を容易に受け入れる「好新家」⁽⁸¹⁾とに分化する傾向が認められていた。そして、両者の相違や対立は、様々な分野で認められ、「必ず相擠排し相剋争して復調和す可らず」⁽⁸²⁾と述べられているように、決して相互に融和することがない。新旧両者のそうした対立は、近代日本社会の中で、「実に救療し難き大病患」⁽⁸³⁾を露呈する結果となる。特に、「恋旧家」に属する人々は、改革に関しては、通常、「旧を棄て、新を謀ることを好むに非ざるなり、唯専ら改革することを好む」⁽⁸⁴⁾性向があり、しかも建設的な改革よりもむしろ「破壊を好む」⁽⁸⁵⁾のである。したがって、彼らは、「怯懦に類する」⁽⁸⁶⁾ために、「尤も保存を好ま」⁽⁸⁷⁾ない態度を示すのである。

そのような破壊的な動向を明確に表しているのが、士族民権を代表する初期自由民権運動の推進者たちに他ならない。彼らは、幕末期には「尚武の習」⁽⁸⁸⁾を保持していたけれども、明治初期に、「民権自由の説海外より至るに及び、彼輩は則ち翕然として之に嚮往し所在相ひ共に結聚して党幟を醸へし、曩日の武夫一変して儼然たる文明の政事家」⁽⁸⁹⁾に転向するのである。すなわち、「封建遺物の馬革旨義」⁽⁹⁰⁾の代わりに、「海外舶賸の民権旨義」⁽⁹¹⁾を、彼らは取り入れただけであり、到底、「真の文明政事家」⁽⁹²⁾であると見なすことはできない。実際、彼らが発行した新聞には、「顛覆、破壊、斬戮、屠殺等の字」⁽⁹³⁾が多く、「唯攻撃することを好むが為に攻撃して初より自ら何の故に攻撃することを知らざるなり」⁽⁹⁴⁾と豪傑君は述べて、初期自由民権運動の過激な特質を要約している。「進化」⁽⁹⁵⁾の仮面を被ったそのような「恋旧家」たちが、士族民権運動を企てて、決して建設的な社会改革を目指していたわけではないのである。したがって、日本社会を適切に改革し、発展させるためにも、破壊的な性向を示す「癌腫」⁽⁹⁶⁾のような「恋旧家」たちを、全面的に取り除くことが要件

となる。豪傑君は、そこで、自ら「恋旧元素」⁽⁹⁷⁾であると規定し、「国の為に癌腫を除くことを求む」⁽⁹⁸⁾と主張するに至る。「社会の「癌腫」⁽⁹⁹⁾」であると自称する豪傑君は、国内の新旧勢力の対立を解消するためにも、武力を用いて、「尽く国内の丁壮を挙げ彼大邦に赴き、小を変じて大と為し弱を変じて強と為し貧を変じて富と為し、然後巨額の金を出して文明の効を買取り一蹴して泰西諸国と雄を競ふことを求むることはなり」⁽¹⁰⁰⁾と主張して、「泰西諸国」に匹敵しうるような「一種の癌腫社会」⁽¹⁰¹⁾を樹立することを決意するのである。こうした見解から、豪傑君は、単なる大陸進出を強引に企てて、国権を拡張しているように思われる。しかしながら、彼の大陸進出論は、同時にまた、破壊的な「恋旧元素」を排除して、国内では、「内治を修明し制度を釐正し風俗を移易し後代文明の地を為す」⁽¹⁰²⁾ことを目的としていることに注目しなければならぬ。

このような見解の背景には、切迫した国際的情勢が見出されるのである。実際、欧州諸国相互の争いは、既に「亜細亜海中の諸島」⁽¹⁰³⁾にまで波及し、例えば、「英国艦隊の掠擄する所は独り巨文島に止まらざる」⁽¹⁰⁴⁾事態さえ引き起こされていた。豪傑君は、そのために、「亨と仏とは欧州にて在て力を角して魯と英とは亜細亜に出で、雄を競ふこと此れ今日の大勢なり」⁽¹⁰⁵⁾と指摘して、激動した国際的状况を強調している。しかも、国際法の意義が無視される場合には、「危殆なる小邦を棄て、安穩なる大邦に赴くの一計有るのみ」⁽¹⁰⁶⁾と豪傑君は述べて、大胆な打開策を提示するのである。しかし、そのような打開策が、必ずしも成功するとは限らない。彼はそこで、「事成らざれば屍を原野に横へ名を異域に留めん、事成るも事成らざるも国の為に癌腫を割去るの効果は必ず得可きなり、所謂一挙兩得の策なり」⁽¹⁰⁷⁾と断言して、大陸進出論や国権拡張論に固執することはないのである。こうした彼の態度には、むしろ冷徹な状況把握力さえも窺い知るこ

とができよう。⁽³⁸⁾

豪傑君の以上のような対外認識にもかかわらず、南海先生は、彼の見解を、紳士君の進歩的な言説と同様に、現実の社会の中では適用することが不可能であることを指摘するのである。すなわち、豪傑君の論旨は、「過去の奇観⁽³⁹⁾」を示して、「回顧して之を快とす可きのみ⁽⁴⁰⁾」と見なされてしまう。そして、紳士君の斬新な発想も、「未だ世に顕はれざる爛燦たる思想的の慶雲なり⁽⁴¹⁾」と判断されて、未来の理想的な世界を想定しているだけであり、結局、「望見て之を樂む可きのみ⁽⁴²⁾」と、南海先生は述べ、「俱に現在に益す可らざるなり⁽⁴³⁾」と断定するのである。南海先生は、そこで、独自の政治論を展開して、二人の言説を批判的に検討することになる。その場合、南海先生が考える「政事の本旨⁽⁴⁴⁾」とは、何よりも「国民の意嚮に循由し国民の智識に適當し其れをして安靖の樂を保ちて福祉の利を獲せしむる⁽⁴⁵⁾」点に要約される。したがって、「国民の意嚮⁽⁴⁶⁾」や「国民の智識⁽⁴⁷⁾」からは逸脱した政策は、たとえどんなに法的な正当性を備えていたとしても、「安靖の樂⁽⁴⁸⁾」や「福祉の利⁽⁴⁹⁾」をもたらすことはない。そのために、専制君主制から一挙に民主制へと急激に変革することは、むしろ国民の混乱を引き起こすだけであり、決して、本来の政治的な發展過程を表すことにはならないのである。こうして、急激な政治的進歩を信奉する紳士君が、民主制を称賛する態度は、現実社会の実情を無視して、「其時と其地とに於て必ず行ふことを得可らざる所を行はんと欲すること⁽⁵⁰⁾」を早急に試みて、現実離れた理想主義的な政策へ赴くこととなったと言える。

ここには、漸進的な政治的・歴史的發展を重視する南海先生の穩健な現実主義的態度を認めることができる。その現実主義的態度を示す政策が、民権の獲得過程に対する見解である。「社会の事業は過去思想の發出⁽⁵¹⁾」である以上、歴史

的な変革を企てるためには、常に過去の政治的・社会的事情を考慮に入れることが要件となる。そうした事情を等閑視して、早急に社会全体の変革を推進することは無謀な試みであると見なされよう。すなわち、紳士君が主張する「進化神は社会の頭上に儼臨するに非ず又社会の脚下に潜伏するに非ずして、人々の脳髄中に蟠踞する」⁽²³⁾ために、漸進的な変革が重要な意義を持つことになる。

こうして、「進化神は人々思想の相合して一円体を成す」⁽²⁴⁾ので、当時の日本社会を揺るがしていた自由民権運動に対しても、漸進的な動向を無視した過激な要求は排斥されざるをえない。南海先生は、そこで、民権の中には、イギリスやフランスのように「下より進みて之を取」⁽²⁵⁾るような「恢復的の民権」と「上より恵みて之を与ふる」⁽²⁶⁾ような「一種恩賜的の民権」⁽²⁷⁾があることを指摘するのである。したがって、当時の日本社会を変革するためには、「恩賜的の民権」から出発して、徐々に人民の意識や考えを成熟させていくことが求められる。その場合、「縦令ひ恩賜的の民権の量如何に寡少なるも其本質は恢復的の民権と少も異ならざる」⁽²⁸⁾点を南海先生が主張し、「恩賜的の民権」から徐々に「恢復的の民権」へと進むことが、本来の「進化の理」⁽²⁹⁾を表すことを述べるのである。ここには、紳士君や豪傑君のような現実離れた見解とは異なり、当時の日本社会の実情に対応した現実的政策を模索する南海先生の態度が示されている。

しかしながら、紳士君や豪傑君の空想的な見解を特徴づけているのは、当時の国際情勢に関する歪められた認識様式であることに注意する必要がある。すなわち、両者の見解が、現実世界の分析から逸脱した理由は、西洋列強諸国の軍事力や国際間の緊張状態を過度に危惧することから生じた「過慮」⁽³⁰⁾に起因している。南海先生は、現実の国際情勢を正しく把握しなかったことから形成された「過慮」こそ、二人の見解が非常に急進的な方向へ向かったことを指摘するの

である。国家間に不当な不信任が生ずる時には、相互の憎悪感情が増大し、それが敵対関係に転化することもありうる。南海先生が、「各国の相疑ふは各国の神経病なり」⁽²⁷⁾と述べているように、「過慮」は、まさにそうした「神経病」から生み出されるわけである。「過慮」に捕われていたからこそ、紳士君は、極度な平和主義へと赴いたのであり、また豪傑君も、過激な大陸進出論を展開したことになる。

南海先生によれば、本来の外交関係は、何よりも相互信頼や相互に積み重ねられた交際から成り立っていて、「道徳の旨義」⁽²⁸⁾を堅守することが是非とも必要となる。特に日本のようなアジアの小国にとっては、隣国諸国とは「好を敦くし交を固くし務て怨を相嫁すること無きことを求む」⁽²⁹⁾ことが不可欠である。したがって、他国の軍勢力を過大評価し、敵視さえするような見方は、極力排斥しなければならない。

ところで、対外認識とは、通常、外国に対する自国の主観的な表象であるために、その表象がどの程度まで現実の国際事情を反映しているのかを知することは、自国側の態度に依存している。そのために、自国側が理想的な平和的外交政策に執着する限り、仮想敵国や対外脅威を想定する余地は乏しいのである。しかしながら、現実には、西洋列強諸国が既に帝国主義的政策へと転換しつつある時期に、果たして平和的外交政策がどこまで有効であるのかは、判断することが難しいと言える。南海先生は、西洋諸国における国際法、すなわち「万国公法」の意義を高く評価しているために、帝国主義政策から無謀な侵略政策へと転化する可能性は、非常に低いと見なしている。しかし、兆民自身も参加した「岩倉使節団」が、明治初期にロシアを訪問した時には、「万国公法」に関する欺瞞性をむしろ知ることとなったことに注目しなければならない。実際、ロシアの宰相ビスマルクは、「岩倉使節団」に対して「万国公法」の特質を次の

ように説明している。

すなわち、国際法である「万国公法」は、「大国」⁽²²⁾に有利な事柄に対しては、効力を持っているけれども、「大国」に不利な問題については、必ずしも遵守されるわけではなく、「兵威」⁽²³⁾が用いられることがある。したがって、かつて「小国」⁽²²⁾であったプロシアのような国が「自主ノ権」⁽²³⁾を保持することは困難であり、「各国ハ、ミナ当国ノ兵ヲ四境ニ用ヒタル跡ヲ以テ漫ニ憎惡シ、軍略ヲ喜ヒ、人ノ国権ヲ掠ムルモノト、非議スル」⁽²⁴⁾場合が生ずる。プロシアは、こうして、「只国権ヲ重ンスルニヨリ、各国相互ニ自主シ、対当ノ交ヲナシ、相侵越セサル公正ノ域ニ住センコトヲ望ム」⁽²⁵⁾ことを目指し、「從來ノ戦ヒモ、皆日耳曼ノ国権ノタメ、已ムヲ得サルニ用ヒタル」⁽²⁶⁾と、ビスマルクは述べて、軍事力の行使を正当化するのである。実際、「英仏諸国ハ、海外ニ属地ヲ貪リ、物産ヲ利シ、其威力ヲ擅ニシ、諸国ミナ其所為ヲ憂苦スト、欧州親睦ノ交ハ、未タ信ヲオクニ足ラス、諸公モ必ス内顧自權ノ念」⁽²⁷⁾が消滅することはないと見なされる。

軍事総裁モルトケも、同様に、「万国公法」は、「只国内ノ強弱ニ関ス、局外中立シテ、公法ノミ是循守スルハ、小国ノ事ナリ、大国ニ至テハ、国力ヲ以テ、其権理ヲ達セサルヘカラス」⁽²⁸⁾という事態を重視し、軍事力を強化して、「武力ヲ以テ欧州ノ太平ヲ護スル」⁽²⁹⁾ことを提案するのである。

「万国公法」の欺瞞性に対するそうした見解は、福沢諭吉にも認められる。すなわち、福沢は、万国の概念には、「世界万国の義に非ずして、唯耶蘇宗派の諸国に通用するのみ」⁽³⁰⁾と述べ、「万国公法」は、日本と欧米諸国との様々な外交問題に対処する法律ではあるけれども、決して双方の国々に公平に作成された法律ではないことを指摘している。欧米諸国の価値基準に基づく「万国公法」は、それらの国々の国益を優先的に保護することになり、アジアの小国である日

本の国益に必ずしも適合するわけではない。福沢は、そのために、西洋的な文明化政策そのものを批判することになるのである。すなわち、日本が組み込まれた世界資本主義的経済機構は、先進西洋諸国に有利に設けられているために、植民地化されたアジア諸国では、西洋人に好都合な「文明化」が行われることになる。「欧人の触れる処にて、よく其の本国の権義と利益とを全ふして、真の独立を保つものありや」という文章が示しているように、西洋人の行動様式は、自己自身の利益に基づいているわけである。福沢は、その場合、オセアニア地方の「サンドウヰチ」島の例を取り上げて、西洋による「文明化政策」がもたらす悲劇的結末について言及していることを忘れてはならない。実際、西洋人の移民が持ち込んだ流行病のために、土着民の人口が減少したばかりではなく、「開化と称するものは何事なるや」と疑問を呈して、「唯此島の野民が、人肉を喰ふの悪事を止め、よく白人の奴隷に適したるを指して云ふのみ」と、福沢は述べて、植民地支配体制の実態を暴き出している。

西洋諸国による植民地支配体制がもたらす「文明化」は、兆民にとっても、厳しい批判の対象となっている。すなわち兆民は、『論外交』と題する記事の中で、欧州諸国とアジア諸国との関係を軍事力に基づく支配と被支配との構図として捉えているのである。特に、「宇内第一ノ文明国」である欧州諸国が、アジア諸国の民衆を「蛮野非鄙陋ヲ以テ之ヲ輕蔑スル」態度は、そうした構図を典型的に示している。強大国による弱小国への植民地支配は、当時の国際的情勢を象徴的に表し、明治日本もそうした国際的情勢の枠組の中へ徐々に組み込まれていたわけである。欧州諸国は、そのために、理想的な「文明国」の資格を備えていたわけではない。自国の価値基準を絶対視しながら、他国の存在を軽視するような偏狭な発想を、兆民は厳しく非難するのである。「遽ニ己レノ開化ニ矜伐シテ他邦ヲ凌蔑スルガ如キハ、豈

真ノ開化ノ民ト称ス可ケン哉⁽²⁶⁾」という文章には、「文明国」の偏狭な優越主義を批判する兆民の態度を窺い知ることができる。

こうしてみると、『問答』の末尾で表明されている南海先生の見解は、必ずしも現実の国際情勢に依拠しているわけではなく、むしろ理想的な国際的環境を想定した外交政策論であることがわかる。実際、南海先生は、「外交の良策は、世界孰れの国を論ぜず与に和好を敦くし已むことを得ざるに及ては防禦の戦略を守り、懸軍出征の労費を避けて務て民の爲めに肩を紓ぶること」⁽²⁷⁾が重要であると主張し、当時の国際情勢に関する切迫した現実的危機の可能性をあまり考慮に入れていないように思われる。しかし、現実の国際情勢に追従して軍勢力を強化していくことが、アジアの小国である日本にとって、果たして適切な政治政策であるのかは、容易に決し難い。南海先生は、むしろ、「徒に外交の神経病を起すこと」⁽²⁸⁾を避けて、紳士君や豪傑君のように、当時の日本を急激に変革する試みに同意しているわけではない。そして彼は、近代日本の課題として、次のような政策を採用することを提案するのである。すなわち、国内の政治制度については、「唯立憲の制を設け、上は皇上の尊榮を張り下は万民の福祉を増し上下両議院を置き、上院議士は貴族を以て之に充て、世々相承けしめ下院議士は選挙法を用ひて之を取る」⁽²⁹⁾ことが求められ、また外交政策に関しては、「務て好和を主とし、国体を毀損するに至らざるよりは決て威を張り武を宣ぶることを為すこと無く、言論、出版、諸種の規條は漸次之を寛にし、教育の務工商の業は漸次之を張る」⁽³⁰⁾ことが要件となる。

このような見解は、確かに陳腐で保守的な性質を備えているけれども、「邦家百年の大計を論するに至ては専ら奇を標し新を掲げて以て快と為すことを得んや」⁽³¹⁾と、南海先生は述べて、自己の主張を正当化するのである。しかしながら、

当時の明治政府は、一八八二（明治十五）年の壬午の変以後、陸海軍の軍事力を増強しつつあり、そのための財源を民衆に対する様々な増税から確保していたことを考えると、南海先生の見解は必ずしも保守的であると見なすことはできない。また、『問答』が出版された時期には、既に自由民権運動が消滅し、新聞・出版の自由が大幅に規制されていたので、「言論、出版、諸種の規條は漸次之を寛に」することを提案する南海先生の言葉は、明治政府の強権的な抑圧政策に対する間接的な批判さえ示唆していると言えよう。確かに、『問答』の叙述には、明治日本の具体的な歴史的・政治的な動向がほとんど言及されているわけではなく、しかも作者の諷刺的な執筆態度のために、時には抽象的な談論の印象を読者に与える傾向がある。

しかし既に検討してきたように、紳士君や豪傑君の主張の中には、兆民自身の理念がある程度まで反映しているし、たとえ眉批には「南海先生胡麻化せり」⁽⁸³⁾と記されていたとしても、南海先生の見解の中にも、兆民の考えと重なる部分を見出すことができる。そこで、近代日本における『問答』の歴史的意義を明らかにするためにも、『問答』は「三酔人」の間で取り交わされた様々な意見を、多角的な視点から書かれた諷刺的作品である以上、その作品が出版された思想的背景を次に検討することが要件となる。

三

『問答』出版時の思想的背景を知るためには、既に遠山茂樹氏や米原謙氏が指摘しているように、一八八六（明治十

九)年、つまり、『問答』出版の前年に刊行された徳富蘇峰の『将来之日本』を参照することが要件となる。実際、兆民は、その著作の再版に序文を書くことを要請されて、次のように書き記している。すなわち、進歩の観念を社会の形成に適用したイギリスの思想家スペンサーを援用しながら、近代日本社会の変革の必要性を主張した蘇峰は、「吾が邦の制度文物の異日必ず当に為すべき云々の状を論じ、頗る精微を極め、文辞も亦た婉宕、大いに世の佞屈難句なるものと科を異にし、読者をして覚えす快を称さしむ」と、兆民は述べて、蘇峰の才能を非常に高く評価している。『問答』の出版が、その数ヵ月後であることを考慮すれば、「感嘆して措く能わず、破格の一言を為さざるを得ず」と記された『将来之日本』が、『問答』の内容に及ぼした影響を、ある程度まで認めねばならない。したがって、「兆民は『将来之日本』によって触発されて三人の人物を造形し、パロディとすることによって『経綸問答』を書いた」と、見なすことができよう。そこで、『問答』の思想的な意義を論及するためにも、『将来之日本』のどの部分が兆民の批判的検討の対象となり、それがいかにして『問答』の叙述内容に反映しているのかを見極めることが求められる。

蘇峰は、近代日本の課題を提示する前に、当時の日本を取り巻く国際情勢を分析することから始めている。

一九世紀の欧州列強諸国では、産業資本主義社会から帝国主義社会へと移行したために、「強者ノ権ノ流行スル」ばかりではなく、「腕力主義ノ隆盛」も波及し、「今日ノ世界ハ開化人力暴虐ヲ以テ野蛮人ヲ吞滅スルノ世界ナリ」という事態が出現することになる。そうした世界で適用されている国際法は、強国の利権を保護するために設けられていて、日本は、「強者ノ権」と「腕力主義」によって支配された世界と必然的に交渉せざるをえないのである。したがって、弱者の立場にある東洋諸国は、欧州諸国の政治的・経済的な制度に包摂されてしまうことになる。蘇峰は、特に欧州諸

国による帝国主義的侵略政策に言及して、「東方論ナル者ハ、今日ニ於テ既ニ早晚其無残無慈悲ナル欧州人民ヨリ吞滅セラル、ノ命運ヲ有シタル憐レナル東洋ノ諸国力、果シテ其ノ如何ナル人種ニヨリ、如何ナル国ニヨリ、如何ナル時ニ於テ吞滅セラルカノ問題ナリ」と述べて、その苛酷な歴史的事情を強調するのである。

しかし欧州諸国は、決して軍勢力のみによって、その国力を増強してきたわけではない。「第十九世紀ニ於テ武力ノ運動ヲ自由ナラシムルノ手段ハ唯富ノ勢力ヲ増加スルノ一アルノミ」という文章が示しているように、むしろ産業資本主義の発展に依拠していることに注意しなければならない。自由貿易と産業革命との相関的な発展こそ、近代欧州諸国が当時の世界において主要な位置を占めるようになったのである。蘇峰は、軍勢力を表す「武備機関」⁽⁸⁰⁾に対して、産業の発展を支える「生産機関」⁽⁸¹⁾という表現を用いて、「今や第十九世紀ノ欧州ハ実ニ生産機関ノ為ニ一大共和国トナレリ」⁽⁸²⁾と書き記して、当時の欧州諸国は軍勢力の支配から徐々に産業の発展を重視する社会へと移行しつつあることを指摘している。

「生産機関」の発達が、そのために、軍勢力を重視する「武備機関」によって特徴付けられた政治制度を变革することになる。そのような歴史的变化について、蘇峰は「彼ノ欧州ナルモノハ其昔時ニ於テハ政治社会ヲ以テ生活社会ヲ支配シタルニ係ラス。今ヤ其生活社会ノ進歩ヨリシテ政治社会ノ進歩ヲ促シ。経済世界ノ交際ヲ以テ政治世界ノ割拠ヲ打破リ。生産機関ヲ以テ武備機関ヲ顛覆スルハ早晚避ク可ラサルノ命運ト云ハサル可ラス」と述べて、「富能ク兵ヲ支配スル」⁽⁸³⁾歴史的な経緯の必然性を明示するのである。したがって、東洋諸国は、「貧ニシテ野蛮ナル国」⁽⁸⁴⁾であり、欧州諸国は、「富ンテ文明ナル国」⁽⁸⁵⁾であるために、日本は、欧州諸国を中心とする国際的産業システムの中に組み込まれてし

まうことになる。

そこで、「今日ノ世界ハ富ヲ以テ兵ヲ制スルノ時代ニシテ富ハ即チ威力ナリ⁽²⁰⁾」という事態を冷徹に認識するためにも、何よりも富の力を増大させることが、当時の日本にとっては先決要件となろう。しかしながら、富の力は、単なる産業機構の開発や整備のみによって増大するのではない。産業社会の発展には、常に「平民的ノ現象」⁽²¹⁾が伴っていることに注目しなければならない。すなわち、蘇峰は、「武備的ノ世界ニハ貴族的ノ社会以テ其力ヲ逞フスルヲ得可シ。生産的ノ世界ニハ平民的ノ社会以テ其力ヲ逞フスルヲ得可シ」⁽²²⁾と述べて、特権的な階層に依存した軍勢力とは異なり、産業社会の発展には、人民の活力が不可欠であることを示すのである。「商業ノ進歩」⁽²³⁾は、こうして、「平民主義ノ進歩」⁽²⁴⁾と密接に結びついていることがわかる。そのような社会的発展の典型的な実例として、蘇峰は英国社会を取り上げている。

実際、英国では、特権的な階層を擁護する「過去ノ抑圧」⁽²⁵⁾と人民が対決してきたために、産業社会が飛躍的に発展し、人民の政治的自由を容認することとなった。そうした歴史的現象が、他の欧州諸国にも波及し、「平民的ノ世界」⁽²⁶⁾が、当時の社会の主流を占める結果となるのである。一九世紀の欧州社会は、そのために、「武備機関」から「生産機関」へと移り、そして、「平民的ノ現象ノ社会」⁽²⁷⁾を生み出すこととなった。蘇峰は、そのような歴史的経緯について、「今ヤ平民主義ノ運動ハ火ノ如ク。電ノ如ク。地球ノ表面ヲ快奔雄走シ而シテ彼ノ生産的境遇ノ必要ハ人民ヲ驅リ。社会ヲ驅リ。如何ナル人類ヲモ如何ナル国体ヲモ悉ク之ヲ平民的ノ世界ニ擠トサントス是レ則チ第十九世紀ノ大勢ナリ」⁽²⁸⁾と記して、「平民主義ノ運動」が歴史的進歩の発展段階に到達したことを指摘するのである。したがって、日本が欧州諸国のそうした歴史的動向の中に包摂される以上、それらの国々とできる限り対等に交渉していくためにも、政治的・経済的

な見地から、日本社会全体を变革することが前提条件となる。その場合、蘇峰にとって批判の対象となるのは、日本社会の中で継承されてきた伝統的な封建的社会制度である。

実際日本では、特権的な武士階層が武力や権力を援用して、社会を支配してきたために、人民自体の権利や正義が無視されてきたことを認めねばならない。すなわち、蘇峰は、封建社会を「大野蠻大圧制ノ社会⁽⁸⁴⁾」と名づけて、その非合理的な実態を厳しく糾弾するのである。日本の封建社会では、たとえ商業が繁栄していたとしても、所詮、「専売特許ノ世界⁽⁸⁵⁾」が形成されていて、産業全体を發展させるような競争原理は、排斥されていた。武士階層による抑圧的な権力が長い期間にわたって社会の中に浸透していたので、「其固有ナル惡臭毒氣ハ増長スルアルモ決シテ減少スル能ハサル⁽⁸⁶⁾」事態が見出され、社会が活性化するような可能性は、根底から絶たれていたのである。そのような封建社会では、「上ミ征夷大將軍ヨリ下モ庄屋ニ到ル迄。皆一樣ニ上ニテハ無限ノ奴隸ニシテ下ニ向テハ皆無限ノ主人⁽⁸⁷⁾」である構図が認められ、すべてが「上下ノ關係⁽⁸⁸⁾」によって社会の諸制度が固定化されていたことになる。こうした見解には、福沢諭吉が、既に『文明論之概略』の中で明らかにした日本社会の特徴が継承されていると見なすことができる。

すなわち、福沢は、そこでは、多種多様な価値観を容認してきた西洋諸国に対して、日本社会はそれらの価値観を抑圧し、排斥して、支配と被支配との相互依存状態を成す権威主義的な統治原理を採用してきたと考えている。そうした統治原理は、「權力の偏重⁽⁸⁹⁾」と呼ばれ、政治組織ばかりではなく、日常生活を含む社会全体に浸透しているのである。社会の中では、「甲は乙に庄せられ、乙は丙に制せられ、強圧抑制の循環、窮極あることなし⁽⁹⁰⁾」という事態が引き起こされ、それが日本の「全国人民の氣風⁽⁹¹⁾」を表すことになる。治者が被治者を支配し、被治者が治者に無条件に服従する

ような人間関係からは、個人の自立した自由意志が形成されることはない。人間は相互に、それぞれ支配と被支配の隷属的な依存状態を生み出し、「強圧抑制の循環」が、日本社会の伝統的な価値原理を条件付けているわけである。

しかしながら、明治政府は、版籍奉還や廃藩置県などの抜本的な改革を断行して、「我邦ノ武備社会ヲ一変シテ生産社会トナシ、貴族社会ヲ一変シテ平民社会トナスノ大基礎ヲ築」くこととなった。近代日本は、こうして、欧州諸国とできる限り対等に交渉するための中央集権的な統治機構を創設したのである。しかし明治政府は、幕末期に主導権を掌握していた薩長勢力によって構成されていたために、「封建時代ノ遺物」が必ずしも払拭されたわけではない。むしろ、明治政府を支配していたのは、「封建ノ遺習」であり、また「土地偏着ノ割拠主義」であつたと言わねばならない。実際、蘇峰は、「吾人ハ今日ニ於テ封建割拠ノ結合ノ外ニ未タ政治上ノ結合ナルモノヲ見サルナリ。封建勲閥ノ外ニ未タ真正ノ政治上ノ権勢ナルモノヲ見サルナリ。封建感情ノ外ニ未タ真正ノ政治上ノ感情ナルモノヲ見サルナリ。実ニ我権威アル政治家ノ腦中ニハ不幸ニモ未タ我カ日本全体ノ社稷人民ヲ網羅スルカ如キ思想ノ欠乏ニシテ。却テ其ノ一地方一団結ノ勢力ヲ以テ天下ヲ支配セントスルカ如キ思想ノ過多ナルヲ見ルナリ」と述べて、旧態依然とした当時の日本政府に固有な「封建ノ遺習」を厳しく批判することになる。そのような閉鎖的な精神は、支配層ばかりではなく、社会改革を唱える人民の方にも見出されることに注意する必要がある。

すなわち、「急進自由ノ率先者」⁽²⁰⁾たちは、イギリスの自由主義を日本に導入し、「日本流若クハ封建的ノ自由主義」⁽²¹⁾を標榜することとなった。したがって、自由民権運動に対しては、必ずしも人民の権利を擁護するのではなく、国権拡張主義と結びついていることを、蘇峰は指摘し、「我自由主義ノ率先者モ其隠秘ナル腦中ハ依然タル封建ノ頑民タルニ過

キサルナリ⁽²⁴⁾」と、批判することになる。明治日本の社会改革は、こうして、結局「陳々腐々ナル封建社会ノ旧主義ノ変相ニ過キ⁽²⁵⁾」ず、そのために、国際情勢の変化に対応しうることは、非常に困難とならざるをえない。こうしてみると、近代日本の将来を考えるためにも、旧態依然とした封建的な遺制を根底から排斥して、新たな社会改革を試みることに緊急の課題となることがわかる。蘇峰は、そのために、「今日ハ実ニ改革ノ時代⁽²⁶⁾」であり、今後は、「生産国トナ⁽²⁷⁾」り、「生産機関ノ発達スル必然ノ理ニ従ヒ。自然ノ結果ニヨリテ平民社会⁽²⁸⁾」を構築することが要件となる。蘇峰は、このように、早急に日本社会を改革して、「我邦ヲシテ平和主義ヲ採リ以テ商業国タラシメ平民国タラシムルハ実ニ我国家ノ生活ヲ保チ。皇室ノ尊栄モ。国家ノ威勢モ。政府ノ鞏固モ。以テ遙々タル将来ニ維持スルノ尤モ善キ手段ニシテ国家將來ノ大経綸ナル者ハ。唯此一手段ヲ実践スル⁽²⁹⁾」ことを提案するわけである。

以上から、蘇峰は、当時の欧州諸国が軍勢力のみを増強していたのではなく、産業の発展や平民社会へと移行していたことを指摘し、近代日本もそうした歴史的な動向に対応していくことが必要であることを主張する結果となる。したがって、明治維新後の日本社会に残存している封建的な遺制や軍備優先政策を排斥して、広範囲に及ぶ人民に支えられた勢力による新たな社会改革が求められるのである。「旧日本ノ分子⁽³⁰⁾」が権力を掌握していた明治政府の封建的な悪習を打破するためにも、早急な改革を企てて、平和主義的政策へと向かう新たな日本社会を構築することが要件となる。しかしながら、「新旧日本ノ戦場⁽³¹⁾」として特徴付けられた当時の社会情勢の中で、急進的な改革が、果たして将来のために適切な方法であるのかどうかは、非常に疑わしい。確かに、兆民は、『将来之日本』の見解に賛同を表明していたけれども、その見解を必ずしも全面的に受け入れたわけではないことは、その刊行直後に、諷刺的な表現に満ちた『問

答』を発表したこともわかる。

『問答』に登場した三人の登場人物は、蘇峰の見解をある程度まで継承しているけれども、明確な結論が示されているわけではなく、また、現実状況の認識や将来の改革についても、首尾一貫した論理に基づいているわけでもない。実際、紳士君の理想的な非武装中立主義的平和主義は、蘇峰の考えとは異なるし、また、豪傑君にしても、決して時代錯誤的な軍備優先主義を主張しているわけではなく、むしろ冷徹な現実認識を伴っていたことは、既に指摘した通りである。確かに、南海先生は、蘇峰の進歩主義的な見解を疑問視しているように思われる。しかし、そのために、『問答』は、徹頭徹尾『将来之日本』に対する批判的な視点を含んでいるわけではない。むしろ諷刺的な表現に満ちた『問答』は、三人の登場人物の語りを通して、時には、『将来之日本』の見解を誇張し、また時には、複雑な現状を単純な判断に集約することなく、多角的・重層的な見方を提示していると言える。すなわち、直截的な把握よりも、諷刺的な方法を採用することにより、流動的で複雑な政治現象を一層鮮明にさせることが可能となる。単なる進歩主義でもなく、また体制順応主義でもない視点を保持することこそ、当時の日本の国際的な実情を読者に提供することができたのではないかと考えられる。『問答』は、その意味で、近代日本の時代的な思潮を、明確に示した作品であると言える。そこで次に、兆民自身の思想的な立場をより明らかにするために、彼が『問答』で提示した諸問題を、その後、近代日本の歴史的経緯の中でどのように取り組んでいったのかを検討することが必要となる。

注

- (127) 幸徳秋水『兆民先生・兆民先生行状記』、岩波書店、一九六〇年刊、三四頁。
(128) 同右。
(129) 同右、三四―三五頁。
(130) 『中江兆民全集』(以下『全集』と略称)、第八卷、岩波書店、一九八四年刊、二七〇頁。
(131) 同右、二二二頁。
(132) 同右、一九一頁。
(133) 同右。
(134) 同右。
(135) 同右、二〇六頁。
(136) 同右、二〇七頁。
(137) 同右。
(138) 同右。
(139) 同右。
(140) 同右、二〇九頁。
(141) 同右。
(142) 同右。
(143) 同右。
(144) 『全集』、第一四卷、前掲書、一九八五年刊、五五頁。
(145) 同右。

- (146) 同右。
- (147) 同右。
- (148) 同右、五六頁。
- (149) 同右。
- (150) 同右、五七頁。
- (151) 同右。
- (152) 『全集』、第八卷、前掲書、一八二頁。
- (153) 同右、二二〇頁。
- (154) 同右、二二一頁。
- (155) 同右。
- (156) 同右、二二二頁。
- (157) サン・ピエールは、戦争状態に陥っていたヨーロッパの政治事情を改善するために、『永久平和論』の結末で、四つの要点を示している。すなわち、第一は、「永久平和の設立は、ただ主権者たちの同意に基づいていて、彼らの反対を取り除く以外にはいかなる困難もないこと」であり、第二は、「その成立はすべての方法で彼らの役に立ち、彼らにとっても、不都合な点や有利な点を比較するものは少しもないこと」であり、第三は、彼らの意思と彼らの利益が一致することを想定することが道理にならなければならないこと」であり、そして第四は、「提案された計画に基づいて一度作られたその設立は、堅固で持続的でなければならず、その目的を完全に果たす必要があること」(Extrait du *Projet de Paix Perpétuelle de Monsieur L'Abbé de Saint Pierre*, in *Oeuvres complètes*, tome, III ed. B. Gagnebin et M. Raymond, Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, 1969, p. 588) が述べられているのである。
- (158) 『全集』、第八卷、前掲書、二一六頁。
- (159) 同右、二一七頁。
- (160) 同右、二二〇頁。
- (161) 同右、二二五頁。

- (162) 同右、二二七頁。
(163) 『全集』、第一四卷、前掲書、一三六頁。
(164) 同右。
(165) 同右。
(166) 同右。
(167) 『全集』、第一卷、前掲書、一九八四年刊、二二三頁。
(168) 同右。
(169) 同右。
(170) 同右。
(171) 同右、二二四頁。
(172) 『全集』、第八卷、前掲書、二二七頁。
(173) 『全集』、第一卷、前掲書、二二四頁。
(174) 『全集』、第八卷、前掲書、二二九頁。
(175) 同右。
(176) 同右。
(177) 同右、二二七頁。
(178) 同右、二三八頁。
(179) 同右、二二七頁。
(180) 同右、二三八頁。
(181) 同右。
(182) 同右、二四二頁。
(183) 同右。
(184) 同右、二四四頁。

- (185) 同右。
 (186) 同右。
 (187) 同右。
 (188) 同右、二四三頁。
 (189) 同右、二四四頁。
 (190) 同右。
 (191) 同右。
 (192) 同右。
 (193) 同右、二四五頁。
 (194) 同右。
 (195) 同右、二四四頁。
 (196) 同右、二四七頁。
 (197) 同右、二四八頁。
 (198) 同右。
 (199) 同右、二四九頁。
 (200) 同右。
 (201) 同右。
 (202) 同右。
 (203) 同右、二五四頁。
 (204) 同右。
 (205) 同右、二五四―二五五頁。
 (206) 同右、二五五頁。
 (207) 同右、二四九頁。

- (208) 実際、丸山真男氏は、豪傑君の見解には、必ずしも「帝國主義的膨張主義の論理」（丸山真男『忠誠と反逆』、筑摩書房、一九九二年刊、二六一頁）のみが反映されているわけではないことを指摘して、次のように述べている。すなわち、「豪傑君の議論には国体論とか、家族国家論とか、後世の国粹主義者や右翼が盛んに強調した考えがぜんぜん出てこないで、むしろ明治の前半期の、全体として開明的な雰囲気と共通している。これから後の日本の膨張イデオロギーになりますと、日本が万国の親国であるとか、八紘一宇といった主張がでてきますが、そういう発想とはおよそ違っています。豪傑君の議論には国際関係についてのパワーポリティックスは非常に明確に出ていますが、それはカラッとした、というかドライな議論であって、国家膨張の神話或は倫理的な正当化ではありません」（前掲書、二二六二頁）と。

- (209) 『全集』、第八卷、前掲書、二五七頁。
(210) 同右。
(211) 同右、二五六頁。
(212) 同右、二五七頁。
(213) 同右。
(214) 同右、二六〇頁。
(215) 同右。
(216) 同右、二五九頁。
(217) 同右、二六二頁。
(218) 同右、二六三頁。
(219) 同右。
(220) 同右、二六一頁。
(221) 同右。
(222) 同右。
(223) 同右。
(224) 同右、二六二頁。

(225) 同右。

(226) 同右、二六四頁。

(227) 同右、二六八頁。

(228) 同右、二六五頁。

(229) 同右、二六八頁。

(230) 久米邦武編『米欧回覧実記』(三)、岩波書店、一九七九年刊、三二九頁。

(231) 同右。

(232) 同右。

(233) 同右。

(234) 同右、三三〇頁。

(235) 同右。

(236) 同右。

(237) 同右。

(238) 同右、三三〇頁。

(239) 同右。

(240) 『福沢諭吉選集』(以下『選集』と略称)、第五卷、岩波書店、一九八一年刊、二五六頁。

(241) 『選集』、第四卷、前掲書、一九八一年刊、二四二頁。

(242) 同右。

(243) 同右。例えば、サルトルは、アルジェリアに対するフランスの植民地支配体制について、その体制を維持する限り、被支配国アルジェリアの社会を根底から破壊するばかりではなく、支配国フランスの方も破滅を引き起こすことに注意を喚起している。すなわち、「植民地主義のただ一つの善行、それは持続するためには、頑固でなければならぬということであり、その頑固さによって自らの破滅を準備するということである。われわれ本国のフランス人としては、これらの事実から引き出すべき教訓はただひとつである。すなわち、植民地主義は自己破滅の道を歩みつつあるということだ」(Sartre, *Situations*, V, Paris,

Gallimard, 1964, p. 47) とサルトルは述べて、植民地主義の欺瞞性を暴きだしている。

(244) 『全集』、第一四卷、前掲書、一二九頁。

(245) 同右。

(246) 同右、一三五頁。

(247) 『全集』、第八卷、前掲書、二七〇頁。

(248) 同右。

(249) 同右、二七一頁。

(250) 同右。

(251) 同右。

(252) 芝原論文一二九—一二三頁。一二三—一二四頁。

(253) 『全集』、第八卷、前掲書、二七〇頁。

(254) 遠山茂樹、『『三酔人経綸問答』の歴史的背景』、『中江兆民の世界』所収、筑摩書房、一九七七年刊、四二—六五頁。米原謙

(255) 『近代日本のアイデンティティと政治』、『ミネルヴァ書房』、二〇〇二年刊、一一六—一五〇頁。

(256) 『全集』、第一七卷、前掲書、一九八六年刊、二八頁。

(257) 同右。

(258) 米原謙、前掲書、一二九頁。

(259) 『徳富蘇峰集』(明治文学全集34)、筑摩書房、一九七四年刊、五七頁。

(260) 同右。

(261) 同右、六五頁。

(262) 同右、六六頁。

(263) 同右。

(264) 同右。

- (265) 同右、七一頁。
 (266) 同右、七三頁。
 (267) 同右、七四頁。
 (268) 同右、七五頁。
 (269) 同右。
 (270) 同右、七四頁。
 (271) 同右、八一頁。
 (272) 同右。
 (273) 同右、八二頁。
 (274) 同右。
 (275) 同右、八五頁。
 (276) 同右、八八頁。
 (277) 同右。
 (278) 同右、八八—八九頁。
 (279) 同右、九六頁。
 (280) 同右、一〇〇頁。
 (281) 同右、一〇一頁。
 (282) 同右、一〇二頁。
 (283) 同右。
 (284) 『選集』、第四卷、前掲書、一七三頁。
 (285) 同右、一七四頁。
 (286) 同右、一七六頁。
 (287) 『徳富蘇峰集』、前掲書、一〇三頁。

- (288) 同右、一〇七頁。
(289) 同右、一〇六頁。
(290) 同右。
(291) 同右。
(292) 同右、一〇七頁。
(293) 同右。
(294) 同右、一〇八頁。
(295) 同右。
(296) 同右、一二〇頁。
(297) 同右。
(298) 同右。
(299) 同右、一一一—一二二頁。
(300) 同右、一一〇頁。
(301) 同右、一〇九頁。